文部科学省検定済教科書　中学校道徳科用　2032廣あかつき　道徳707

中学生の道徳

自分を見つめる 1

廣済堂あかつき

掲載教材
関係者様用

15 音を宿す

愛知県岡崎市。ここに一軒の太鼓店があります。江戸時代から百五十年続く老舗。お祭りなどで使う和太鼓を作ってきました。しかし、時代の流れとともに、伝統的な和太鼓の需要は減る一方で、店は閉店寸前まで追い込まれました。そんなピンチを救ったのが、若き六代目の三浦彌市さんです。彌市さんの作る和太鼓は、これまでの和太鼓とはちょっと違います。

「担いで動き回れる重低音があったらいいなということで作ったのが、平担ぎ。」

大きくて重たい和太鼓を小さく軽量化。腰にベルトで装着すれば、踊りながらでも演奏できます。そして現在開発中なのが、前代未聞、チューニング機能がついた和太鼓です。ネジを調節することで、なんと、音を高くしたり低くしたりできるのです。この機能を取り入れたのは、演奏する人たちのあるニーズに気づいたからでした。

「今の演奏家は、いろいろな音のバリエーションをもって、その中で音作りを楽しんで演奏していくというのが一つのスタイルなんです。」

彌市さんは、太鼓を作る職人であると同時に、和太鼓のチームで太鼓を演奏する奏者でもあります。こんな和太鼓があったらいいのに……。奏者だからこそ気づく「理想の和太鼓」を、彌市さんは職人として形にしているのです。

「自分が使ってわくわくするというのが、僕にとっては一番の指針になっています。今の時代に合ったものを生み出していくのが、とても重要で大事なことだと思っています。」

老舗　代々続いている信用のある店。

前代未聞　今までに一度も聞いたことがないこと。非常に珍しいこと。

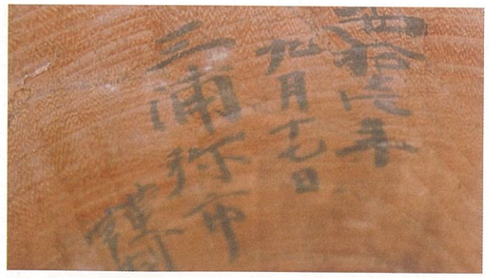
道徳ノート 38ページ

革新的な和太鼓が話題を呼び、自信を深める彌市さんの心を大きく揺さぶる出来事が起こりました。それは、運命的な出会いでした。

二年前、彌市さんのもとに、「修理をして欲しい。」と、ある古びた和太鼓が持ち込まれました。太鼓の内側には、作った職人の名前が記されていました。

『明治四十一年　三浦彌市』

なんと、それは、初代の彌市が作った太鼓だったのです。百年以上も前にこの店で作られた太鼓が目の前に……。彌市さんは丁寧に皮を張り替え、修理しました。そして仕上がった太鼓をたたいたとき、その音色に衝撃を受けました。



▲太鼓の内側に記された名前

「同じ音がする。」

毎日自分が作っている太鼓と同じ音が響いたのです。

初代の頃から変わらない、この店だけの音。どれだけ太鼓の形が変わっても、変わることのないものがあることに、彌市さんは気づいたのです。

「太鼓にとって、何が一番大事かというと、形のきれいなものがよし、じゃないんですね。その先にある『音』。自分が生み出す新しい太鼓、いろいろありますけど、そういった『音』をしっかり太鼓の中に宿してあげて作ることができたら、もしかすると何百年と受け継がれていくものになるのかなと思っています。」

彌市さんのもとには、他の店で作られた太鼓も修理に持ち込まれます。どの太鼓にも大切に受け継がれてきた音がある。彌市さんは、その音を見極め、再現することに

全力を尽くすようになりました。

ある日、彌市さんは、お祭りで使う太鼓を作って欲しいと依頼され、遠く愛媛県までやってきました。どんなお祭りで、どんな太鼓が、どんな音を響かせているのか、自分の目と耳で確認するためです。

「やっぱりこの場に来て、この空気を感じてみて、この雰囲気も含めて、僕らは音作りにつなげていかないといけない。」

今、彌市さんは、あるモットーを胸に、仕事に臨んでいます。

「『温故知新』ですね。『故きを温ねて新しきを知る』というのをすごく大事にしています。新しい太鼓を作るときに、古い太鼓からの『生きた音』というのを、しっかり音作りに反映させることで守っていけるんじゃないかと感じています。」

▲三浦彌市さん

考える・話し合う

学習の手がかり

伝統や文化を継承していくために、なぜ「故きを温ねて新しきを知る」ことが大切なのかを考える。

- 「音を太鼓の中に宿す」とは、どういうことなのだろう。
- どれだけ形が変わっても「変わることのないもの」とはなんだろう。

考えを広げる・深める

- 日本の優れた伝統や文化を見つけ、その継承に尽くした人々について調べてみよう。

私たちには伝統を破壊する自由が与えられているのではなく、伝統を活かす自由のみが許されている。（柳宗悦）